

2017年6月9日 全4頁

# 英国総選挙の結果速報

サプライズ再び

ユーロウェイブ@欧州経済・金融市場 Vol. 91

ロンドンリサーチセンター シニアエコノミスト 菅野泰夫

## [要約]

- 6月8日に英国で実施された総選挙は、午後10時より即日開票された。英国時間6月9日午前7時30分現在、メイ首相率いる保守党が315議席で第1党の座を守ったものの、単独では過半数（326議席）に届かず2010年の選挙以来のハングパーラメント（宙吊り国会）となるのが確実となった。最大野党、労働党は261議席を獲得し、前回から大幅に議席数を増やした。
- 英国はハングパーラメントになった場合、基本的に政権樹立の優先権を巡るルールが存在しない（現政権与党や選挙での第一党が必ずしも優先されるわけではない）。ただ現内閣は新たな議会の信任が得られるかどうかを確認するまで解散する必要はない。また、総選挙から次回国会会期の初日までの間は12日間が望ましいとされ、スペインやオランダなどとは異なり、延々と連立交渉が続くわけではない。
- コービン労働党党首は議席獲得を受けた演説で、英国国民は緊縮財政に愛想を尽かしており、国民の信任を得ることのできなかつたメイ首相は辞任すべきとした。いずれにせよ当初の保守党のシナリオから大きく軌道修正が必要であり、EUとの離脱交渉に多大な影響が起きることは確実であろう。

## 英国総選挙の結果速報

6月8日に英国で実施された総選挙は、英国時間（以下同様）午後10時より即日開票された。6月9日午前7時30分現在、メイ首相率いる保守党が315議席で第1党の座を守ったものの、単独では過半数（326議席）に届かず2010年の選挙以来のハングパーラメント（宙吊り国会）となることが確実となった。最大野党、労働党は261議席を獲得し、前回から大幅に議席数を増やした。労働党は、保守党からの議席奪還や、保守党が重点選挙区として労働党の牙城を取り崩そうとしていた選挙区を死守するなど、イングランドの選挙区において大健闘して保守党に大きな打撃を与えた。

投票締切り直後（6月8日の午後10時すぎ）に発表された出口調査結果に基づく予想獲得議席数で、保守党が過半数を割り込むとの指摘された途端、ポンドは対ドルで急落している。ただこれは保守党の過半数獲得に対する懸念によるものというよりは、総選挙が再度行われる可能性の高まりや、スコットランド住民投票の可能性の増大など、今後の英国政治・経済の先行きに対する不透明感が強まったことが要因とされている。

労働党躍進は、若年層の投票率が予想以上に高かったことが主因と考えられる。僅差でEU残留と想定されていた2016年の国民投票でEU離脱となったことで、「だまされた」と感じた若年層の逆襲ともいわれている。また、労働党支持が多数を占めるロンドンの選挙区では、投票時間内に危ぶまれていた天候が崩れなかったことも若年層の投票率増加に功を奏した。

図表1 英国総選挙の結果（英国時間6月9日午前7時30分現在）

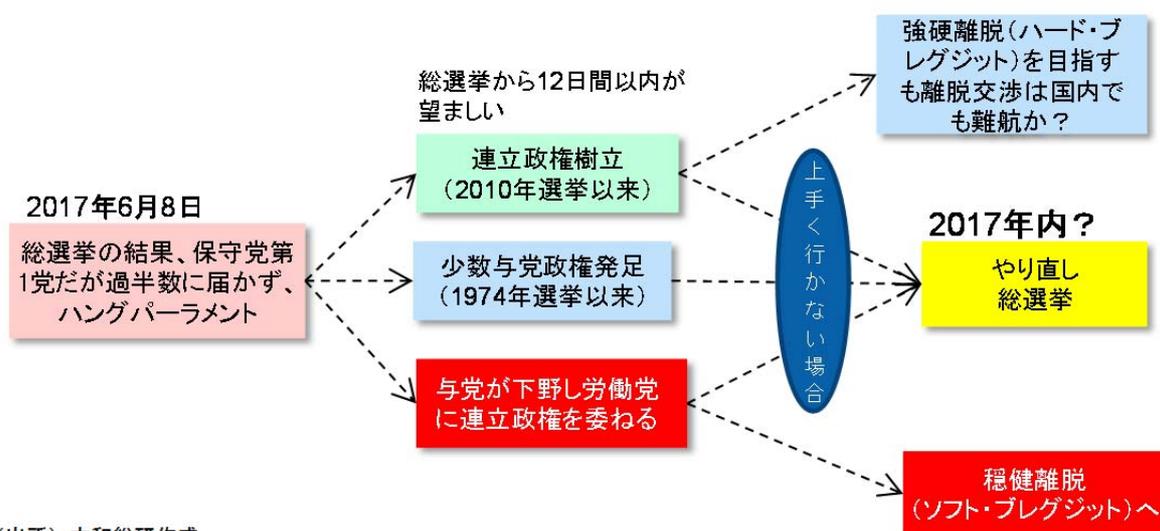
政党名	前回選挙（2015年5月7日）の獲得議席数	解散時（2017年5月3日）の議席数	今回選挙（2017年6月8日）の獲得議席数
保守党	331	330	315
労働党	232	229	261
自由民主党	8	9	12
スコットランド民族党（SNP）	56	54	35
民主統一党（DUP）	8	8	10
その他	13	18	13

（出所）英国選挙委員会より大和総研作成

## 今後の展開、ハングパーラメント、ブレグジットの行方は？

英国はハングパーラメントになった場合、基本的に政権樹立の優先権を巡るルールが存在しない（現政権与党や選挙での第一党が必ずしも優先されるわけではない）。ただ現内閣は新たな議会の信任が得られるかどうかを見るまで総辞職する必要はない。また、総選挙から次回国会会期の初日までの間は12日間が望ましいとされ、スペインやオランダなどとは異なり、延々と連立交渉が続くわけではない。2010年の選挙でも今回と同様にハングパーラメントとなったが、第一党の保守党と第三党の自由民主党が短期間で政策的な合意に至り、選挙から5日間で連立政権が樹立されている。ただ今回は二大政党の政策に共鳴する少数政党が少なく（自由民主党は連立参加を再三にわたり否定）、少数与党政権が重要法案において野党からの協力を確保する方式も十分想定される。その場合、現在、メイ首相が目指している強硬離脱（ハード・ブレグジット）の方針を労働党のソフト・ブレグジット方針に擦り合わせる必要となるため、多大な時間を浪費する可能性が高く、EU側との離脱交渉期限である2019年3月30日に間に合わないリスクが高まる。近年の選挙で少数与党政権が誕生したのは、1974年2月の総選挙でハングパーラメントとなった際の、労働党（ウィルソン首相）政権だが、当初から長期的なものとは受けとめられておらず、同年10月にやり直し総選挙を実施している。

図表2 英国選挙後のリスクシナリオ



(出所) 大和総研作成

労働党主導の左派連合もその可能性がないわけではないが、労働党のコービン党首が連立政権の可能性を明確に否定していることもあり、メイ首相は保守党が第一党（最大得票率）であれば、政権を継続して担う用意があると発言しており、連立政権の可能性が高いのは保守党と少数政党（DUP等）の組み合わせといわれている。

ただ、いずれにしろ今回の選挙の争点にとメイ首相が求めていた、ハードブレグジットに対する国民の信任は得られなかったという結論になる。総選挙前は保守党が過半数を握っていたにもかかわらず、大きな賭けともいえる総選挙を行い、惨憺たる結果を招いたとして、保守党内の怒りは非常に大きいとされる。不必要な選挙を招いた責任を問われ、強硬離脱派の若手か

らの支持が厚いデービッド・デービス EU 離脱担当相や、国民の人気が高く（再選挙対策として）ボリス・ジョンソン外相などがメイ首相の後継役になるというシナリオもささやかれている。

コービン党首は議席獲得を受けた演説で、英国民は緊縮財政に愛想を尽かしており、国民の信任を得ることのできなかつたメイ首相は辞任すべきとした。いずれにせよ当初の保守党のシナリオから大きく軌道修正が必要であり、EU との離脱交渉に多大な影響が起きることは確実であろう。

（了）